慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フッサールのカント観(完)
Sub Title	Husserls Ansicht uber Kant : Folge u. Schluss
Author	山本, 万二郎(Yamamoto, Manjiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1958
Jtitle	哲學 No.35 (1958. 11) ,p.185- 213
JaLC DOI	
Abstract	Husserl hebt seine progressive Methode gegen Kants regressive Methode ab. Diese ist ein konstruktives Denkverfahren, dagegen jene ein konstitutives Intuitionsverfahren, welches nur den letzten Grund erreichen kann. Dann erklart er die Bedeutung der kopernikanischen Umdrehung in Kants Philosophie. Wenn Kant auch von der Wolffschen Ontologie her gestammt hat, ist er der Erste, der das ganze Sein der Welt in der transzendentalen Intersubjektivitat konstruktiv zu erfassen versucht hat. So hinweist er, dass die echten Motivierungen von Kants Philosophie auf die Letzte mit denen der transzendentalen Phanomenologie ubereinkommen sollen. Letztens zeigt er, dass Kant nicht nur die Wissenschaften und die objektive Welt als ihre Gegenstande, sondern auch die Lebenswelt als ihren grundlichen Boden sebstverstandlich vorausgesetzt hat, und dass doch in Wahrheit nur durch den Ruckgang auf die phanomenologische Analyse solcher Lebenswelt die Idee der Phanomenologie erreicht werden kann. Nach Husserl liegt die Aufgabe der Philosophie d.h. Phanomenologie in der Offenbarung der universalen, dem Menschentum als solchen "eingeborenen" Vernunft.
Notes	I 哲学,慶応義塾創立百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000035-0190

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フッサールのカント観(完)

山本万二郎

七　遡行法と前進法　方法の問題　三

一九二四年「カント批判とライプニッツ批判」に於て再び方法の問題が取扱われている。(註)

註　この論述は第七巻本文最後の第二十六節についての註釈であるが、註釈に於ては主として遡行法が本文に於ては主として前進法が採上げられている。

一　遡行法

1　その地盤と前題　カント及び新カント学派の特殊な遡行的先験的方法は、究極的な、従って純粋に先験的な地盤の上に確立されたものではない所の、前提を有している。即ちカントに於ては数学物理学客観的自然科学一般が事実として確立されたものとして前提されている。而してそれらが究極的にいかなる地盤に於て成立する

のかについて問うていない。しかるにそれこそが問題なのである。(VII370)

2　二つの遡行の方向　素朴的立場では例えば純粋数学に於ける如く、原理と理論との間に前者が後者の「可能の制約」として成立するかどうかを問うのである。(論理的根拠を求めることに通じよう。)これに対し反省的立場では[1]、最初の認識に於て「絶対に疑いのなかった」対象の存在とその様相とが問題となる。即ちその超越化の可能性と意味とが問われる。かくてその「自体存在」の「確認」を把握すべき明証の権利要求[2]が問題となる。(VII371)(意識根拠への遡行であろう[3]。)

(1)　これを認識論的見方ともいう。VII371

(2)　権利の問題について、VII270, 281

(3)　二つの反省について、VII260ff.

二つの遡行の中、前者は不十分乍ら本質的還元の方向に、後者は先験的乃至現象学的還元に通じよう。

要するにカントの遡行法は前者に留まって、デカルト的な真の「我思う」といふ絶対的地盤に達しないのである。[註](VII373)

註　カントは類例なき直観力を以て先験的主観性の本質構造を見た。しかしライプニッツと共に、最後の基礎づけに到達しなかった。(VII197)

二　前　進　法

1　遡行法から前進法へ　カントの遡行法は、直観的に妥当なる認識の可能の制約を追求するのであるが、

(Ⅷ189) 哲学は元来絶対に基礎づけられた学問であって、それは絶対に洞見し得る根本的根拠からのみ出発し、而して絶対に偏見のない、各歩毎に明証的な原理によって是正される基礎づけの途を上昇することの出来るものである。この手続は唯前進的でのみあり得るし又そうあることが許されるのみである。(Ⅷ190-191) 換言すればあらゆる科学者は或る意味で構成的遡行的に行う。しかしそれによって単に一つの見積りと暫定的な蓋然性が得られるだけである。従って確固たる基礎による前進法に移行(註)しなければならぬ。(Ⅷ197)

註　誤れる遡行法と真の遡行法について、(Ⅷ117-8, 455)

2　二つの構成　カントは遡行的手続ととして、範疇直観形式図式原則の演繹を試みた。しかしそれはカントの意味でも普通の意味でも演繹されていない。蓋しそれは(勝手な)構成的思惟手続であって、直観は従属的である。従ってそれは下から(基礎根源から)上昇して、証明から証明へと直観的に進む所の、意識の(真の)構成的能作の解示ではなく、更に又反省の自由に委ねられるあらゆる視野に関する内面的な解示でもない。(Ⅷ197-8)

要するに遡行的方法もカントに於ては究極的根源まで遡行していないし、又その手続は思惟による(誤れる)構成法であって、直観的な(真の)構成ではない。遡行法を真に徹底的に行えば、当然前進法に帰着すべきである。即ち真の哲学は根源からの直観的構成としての前進法によらねばならないのに、カントにはそれが欠けているのである。

かくて遡行法と前進法、思惟構成法と直観的構成法として、両者は一見全く対蹠的である。しかし両者はあらゆる意味で結合することが出来ない所の、相背反する方向でも、平行的直線でもないであろう。いわば前者は後

者の飛躍的延長線上にあるともいい得よう。それ故にこそカントを現象学の理念史的図式の一項に加えたのである。かかる観点からカント哲学を見直したのが、次の論文であると解し得よう。

八　コペルニクス的転回

一九二四年「カントのコペルニクス的転回とかかるコペルニクス的転回一般の意味」は、同年の「カントと先験哲学の理念」の姉妹篇であり、前者は後者の準備のために書かれたものである。(註) そこに於てフッサールは、カントの感性論と分析論とを解釈的に叙述し、特にその分析論に関してコペルニクス的転回を論じている。

註　第七巻編者の序XXXI

1　先験的感性論

我々は無限に多様な世界環境に関係し乍ら、その際同一の世界的事物に関係し而して一つの世界が存在すると言い得るためには、どの様な条件が充たされねばならないかが問題である。先ずそのためには直観的世界が現象するということが可能でなくてはならぬ。而してその現象に対して先天的制約を見出そうというのが感性論である。(VII210) 時間と空間とが正にかかる現象の制約である。その事は同時に、感性的現象は単に内在的な感覚与件とその複合のみでなく、我々の体験に現われる事物の現象であることを意味する。(VII211) 即ちそれは一方体験の内的現象であると共に、他方我々の外にある時間的空間的存在の知覚であることを意味する。かくて一定の

時間形態空間形態や時間位地空間位地等の時間空間の規定を有し、かくかくの感性的性質を有する事物が現われるのである。(註) かかる時間空間の規定が事物の知覚を可能ならしめる個別化の形式である。ここに於てあらゆる可能なる現象に規則を指令する所の本質法則に出会うのである。それが感性論に於ける知覚可能の制約である。即ち空間時間が事物の本質であることが、その知覚可能についての本質法則である。(VII212)

註　空間形態について、VII386

しかし個別化の原理としては、かかる現象の法則は不十分である。又感性論の制約を充たしたものが直ちに精密科学の対象でもない。ここに感性論の限界と、先験的論理学への移行の問題が起る。

2　先験的論理学への移行

先ず我々にとって単に現実的に知覚されるばかりでなく、知覚され得べきもの即ち知覚されなくとも認識され得べきものが求められ、而してそれが可能であるためにはいかなる制約を充たすべきかが問題となる。換言すれば直観の対象が同時に経験的認識の対象となるためには、直観の対象はいかなる制約を充たすべきかが問題となる。(VII214-5)

先ず与えられる知覚の多様性の事実について、依存性の法則の存立するのを見る。即ち事物の現象は、認識するものの身体に依存しその身体の現象は「認識するもの自身」に依存する。(VII215) それ故相対主義が生ずる。従って一つの世界の認識が成立するためには、相互主観的理解に進まなくてはならぬ。但しその依存性がどこまで同一化に達し得るかが問題である。(VII216-7)

次に因果性の法則が存立するのを見る。即ち時間空間の中に於て起る個別的のものが、他の時間空間の地位に於て起るものに、どの様に依存するかについて推究し得るための命令乃至先天的規則は因果性の外にない。(VII217-8)

しかしたとえかかる規則が存立するとしても、各人が精神物理的環境にある限り、その規則は帰納的経験的であり、個別性を免れない。それによって一つの世界の認識の可能を直ちに保証することは出来ない。(VII218) 従って差し当りかかる理性的に前提される一つの世界への漸次的な前進と接近の可能性に対する保証を以て満足しなくてはならぬ。(VII219-220)

かくて今や更に一歩進んで無制約的に妥当する判断と真理の基礎づけの仕方が問題となる。(VII220) 一切の人による唯一の世界があるとすれば、その世界は感性外の標識によって、即ち偶然的な身体構造に依存しないものによって規定されなくてはならぬ。従ってかかる規定は特殊な感性的性質でも感性的空間時間形態でもあり得ない。しかし一方に於て経験されるものは直接には現象の外にない。換言すれば一切は現実的な知覚と想起の再生と未来の期待及びその変容としての現象である。而してその期待が現象の綜合に於て一致的に繰り返えされればされる程、即ち経験が充実すればする程、その形式は内容を充実するのである。かくて次第に交渉的に拡大して公共の空間と、知られざるもの忘れたものをも含む(普遍的な)時間の中に入り込むのである。これによって直観的現象が経験的認識の対象となり、一つの世界が与えられる地盤に到るのである。即ち時間空間という位地体系は必然的に共通であり、相互主義的認識可能の原理である。かくて感性的規定は非感性的規定と法則的な関係に立たねばならぬ。(VII222-3)

勿論我々はかかる非感性的規定として、形式論理的及び形式存在論的概念を有している。しかし更に重要なのは、あらゆる直観あらゆる意識に属する多様の統一形式及び展開形式である。その形式とは同等性相違性全体と部分等である。しかし感性的同等性と概念的同等性とは異る。[1] ここに於て感性を超えて概念性のロゴスの形式に於ける判断との理性機能に関与する。しかし一方かかる理性機能と無関係な純粋なる感性というものはなく、到る処に志向性と自発性とが存している。[2] しかし感性に対して概念的把握は悟性であるが、それはいまだ生産的ではなく、それに対し理性は理念創造的である。但しかかる能力の区別は重要でない。[3] (VII22—3)

(1) この点について、「経験と判断」二九七—八頁。
(2) 感性と悟性とについて、(VII404)
(3) 感性悟性理性について、「経験と判断」に於ける分肢構造参照。
移行の問題について、「デカルト的冥想録」一七三頁参照。

3 先験的分析論に於けるコペルニクス的転回の意味

分析論に於ては更に存在論的形式が認識論的形式となるためには、何等かの仕方で図式化されねばならぬことが示されている。しかしこれらのことも重要ではあるが、さらにカントの思想形成の内面性と価値とを示し、歴史上未曾有の新しい点を示すものは、次の事である。即ち彼は、認識する(交渉的な)主観性が実在世界の現存在の正当な確信に達し、而して実在世界を認識出来るための可能性の先天的制約を研究しようという問を最初に提出したということである。(VII225)

コペルクス的転回は、[註] ここに於て余り明らかでないが、しかも真の哲学にとって決定的意味を有する。これまでの人は所与の経験世界を所与のものとしてそのまま受入れ、又認識するものを人間として世界の一員としてこの世界の中に組み入れておいた。而して認識に到達し得ることと共に、その達成のための根本的規則としての矛盾律や公理も亦、彼等にとっては自明的のものであった。要するに人は世界を持ち、信念の中に生きているのである。

註　コペルクス的転回について、I 171, VII 202, VII 240

しかしカントにとっては全く反対の新しい方向に問題があった。即ち右の様な見方は正に一つのこの世的な(mundan) 認識である。而して単純な知覚から始まって、記憶期待経験によって充たされるべき開放的地平の予測区別結合関係というものから、学問的認識に到るまで、一切の認識過程は主観的過程である。(VII 225) この様に言うことは世界認識の価値を故意に貶すことではない。証明し得ざる必然的事態の単純なる提示である。そこで次の問題が起る。即ち主観性が自己の自律性[1]から又自己自らを解釈し乍ら、世界即ち正にこの世界の存在を正当に認識するためには、いかなる主観的な可能の制約があるかということである。(VII 226) かくてカントは純粋主観の中に行われる世界認識の本質的制約の解明によって、世界そのものをその本来の真の意味で明らかにしようとする最も必然的な学問を最初に試みたのである。[2] (VII 227)

(1)　主観の自律性について、VI 272, 274

(2)　この点が次の論文で先験的「観念論」として指摘される所である。(VII 277-8)

4　カント哲学の功罪

元来カントはヴォルフの存在論[註]から出発し先験的哲学に於てもいつも本質的に存在論に方向づけられている。彼は客観的実在が客観的に認識され得べきならば、客観的実在が持たねばならぬ所の、必然的存在論的形態というものに興味を有した。かくて時間空間数学的法則因果法則が見出されたのであるが、経験に於てもかかる合法則性が存立する場合にのみ世界の認識が可能となるのである。(VII 227)

註　存在論について、VII 224, 281, 388

しかし認識されるものが主観的過程の中に於て打ち立てられるとすれば——カントにとってこの事はいつも自明的である——かかる理論は、之れが認識に於て能作する全主観性をそのあらゆる機能的な本質組織に関して考量する場合にのみ、その実際の解明と厳密な学問的解決とを提示し得るのである。

しかるにカントはその事をまだ行うことが出来なかった。第一版の先験的演繹論に於て唯僅かの研究を行ったに過ぎない。[註]

註　第一版について、VII 281, 289, III 148

更にカントは直観的及び思惟的な認識の全く身体的な精神物理的根拠づけを到る処で前提し乍ら、認識論の問題としなかった。而してそのために戦慄すべき人間主義に陥入り更に形而上学的帰結を引起し、かくて初めからアプリオリ、先験的能力、先験的統覚の概念を非学問的なものにおきかえたのである。[註]

註　この点が後に神話的として彼の非難した所である。

要するにカントは相関的として不可分に関連する問題の全体をいまだ認識していないということに於て、問題を余りに簡単に提出したのである。(註)

註　単純について、VII377

しかし他方に於て、カントの不滅の功績は、彼が時代の子として殆んど専ら自然科学やその因果論に方向づけられているにも拘らず、可能なる客観性のあらゆる形式に対して、即ち彼に於ては道徳的世界や美的世界に対しても、先験的設問の歩みを進めたということである。(1) 更にそれを越えて彼は目的論的な世界観(2)を先験的考察の範囲に引き入れたのである。但しそれは完全に十分ではなかった。(3) (VII228)

(1)　これが次の論文で体系的として指摘される点である。

(2)　目的論について、フッサールはその一九〇八年「対決」の論文に於て、先験的現象学は純粋意識に還元することによって目的論的形而上学の可能性即ち機械論的自然把握と目的論的自然把握との真の有和をも可能ならしめるといっている。(VII382)

更に「危機」に於ては、私の目的論的本質或は私の生命意味といい、(VII486) その他歴史的目的論及びそれに類する用語を屢々用いている。(VI319, 432, 447, 491)

又それに関して énteléchie なる用語も用いている。(VI13, 271) これについては、Diemer : Phénoménologie de Husserl (Les études philosoqhiques, No 1, 1954) 参照。

その他目的論という用語は、認識に於ける志向構成充実綜合の問題についても用いられている。(VII373)

(3)　カントは「実践理性批判」や「判断力批判」に於ても存在論的見方をしたと解している。(VII229)

九　先験的哲学の理念

一九二四年「カントと先験的哲学の理念」は同年五月カント記念祭に於ける講演であるが、そこに於て現象学とカントの先験哲学との究極的対照を行っている。

現象学とカント哲学とは、その根本的前提指導的命題、方法に於て遠く離れているが、「論理研究」以来の現象学的研究から見て両者間に本質的類似が見出される、それは究極的学問たらんとする点であって、その究極的哲学は結局現象学に帰するのである。(VII230-1)即ち現象学は本質的見方によって先天的学問の体系を形成するのであるが、かくて見出される先験的アプリオリは先験的事実の基礎となり、更にかかる先験的根拠は経験科学の基礎(註)となる。(VII234)

註　事実経験本質について、VII237, 256-7, 365, 390

かかる絶対究極の根拠から上昇的に進む学問という点に於てカントと一致する限り(1)、カントに先験哲学の先駆的意味を認めることが出来る。即ち何人もカントからの精神的影響とその動機づけの力を受けないものはない。但しそれが正しい方向をとるためにはカントに於ける物自体悟性先験的統覚意識一般についての神話(2)乃至形而上学的要素を捨てなければならぬ。しかしその事はカントを理解することであると共に、カントを出ることであり、かくて真の先験的主観性に到るのである。(VII235)

(1)　この点は従来より一層カントに同情的である。

(2)　神話について、VI116

尚現象学にも素朴的と先験的とある。[1] 後者に於て本質学に達する。そこに於て意識一般の無限の本質構造を見るのであるが、この新しい方向の中にカントも動いている。[2] 而してそれが根源的に上昇する第一哲学なのである。(VII236-7)

(1)　二つの現象学について、VII355

(2)　新しい方向について、VII237, 364, 387

それはデカルトの「我思う」に始まるものであるが、カントはそれを見失った。この最後の反省をカントが行っていたら、カント哲学は全く様子を異にしていたであろう。(VII237)

しかしカントの遠大な展望を支配していたものは、先験哲学の理念である、たとえそれが混乱しているとしても、その動機づけに戻って取出して見よう。(VII239-240)

かくてフッサールは次の様な項目の下にその動機づけを提示している。(VII240-280)

1　自然的な考え方の改革

2　世界の自明性と意識生命

3　先験的経験の領域の開示

a　純粋主観的及び相互主観的意識

b　先験的本質研究と先験的事実学

c　自然的及び先験的反省と志向性の土台

d　自然的反省と心理学的還元

4　世界を「問題の中におく」ということの意味

5　先験的「観念論」の確認、その体系的学問的貫遂

これらはカント哲学の祖述或は解釈というよりは寧ろフッサール自身も暗示する様に、殆んど現象学そのものの次第に深まり行く順序に外ならない。而してそれがカントの真意であると解するのである。(註)

註　ここには右の項目の指摘のみに留める。しかしその中には現象学の理解にとっても重大な意味を有する指示が含まれている。例えば事実と本質との関係（3のb）（VI234, 256-7, 356, 385）及び相互主観性の多義性（3のb）。更に次の「危機」への関連として重要な意識生命（2）（VII114-5, VI281）普遍的生命（3のb）（VI135, 148, 153, 175, 258）及び主観の二重性（5）（VI115, 265, 275）の概念。更にそれらと関連しつつカントとの関係に於て重要な純粋意識一般（3のb）（VII227, 256, 281, 360-1, 390, 393, VI275）及び先験的観念論（5）（VI399, VI271-2, I118）その他権利（4）理念（4）（I57, VII383, 392, 278）等の概念が含まれている。

最後にフッサールは引続いて二項目に渉ってカントに対する見解を述べている。

6　カントの学的先験哲学の最初の体系的試図(註)

註　ここに於ては、カントが全く厳密学への志に充たされてその体系を初めて試みた事（VII228-9）、但しヴォルフの存在論の影響の下にあった事（VII227, 229, VI94, 99, 275）、それにも拘らずカントは第一版の先験的演繹論に於て主観性とその意識機能について不十分乍ら試みた事（VII228, 289, 386, 387, 404, III148, VI106）を指摘しているが、それは前論文の4「カント哲学の功罪」に於けると同趣旨のものである。而してカントの先験哲学は結局先験的現象学に帰着すると解している。（VII281-2, 386）

7　カントの歴史的意味結局(註)カントの哲学改革は、我々にとって単に歴史的事実として解されず、寧ろ自然的

認識の方法から先験的認識の方法へ、客観的独断的な世界認識から先験的な世界認識への、哲学の本質意味そのものの中に指示された展開の方向の歴史的に最高の（いまだ不完全ではあるが）実現として解される。（VII 285）即ちカントの既に成立した体系ではなくして、その哲学に於ける改革的意味をとらなければならないのである。（VII 286）

註　これは7「先験哲学の歴史的展開とその実践的意味」と8「カント後継の意味」との要約である。

かくて現象学の設問や説明方法の方向は全く独自のものであって、カントや新カント学派によって直接的に規定される所のものではないとはいえ、而して現象学的方向も古い考え方に対して反動的であり全く新しい考え方を形成するにも拘らず、現象学的方向はカントの最も深い意味を実現しようとする試みである。（VII 286-7）

従って我々は次の点でカントと一致する、即ち我々は時代的要求に適合する世界観に於てではなく、厳密な最後妥当的の理念を追求する学問の意味に於て、先験哲学を実現しようと努力するということである。（VII 287）

この講演は直接には同年の前論文の整理完成であり、間接的にはそれ以前の諸論文の概括としての意味を有すると共に、既に諸所に暗示されている様に、次の「危機」に於ける最後の思想段階への予備的な意味を有している。前論文がいわば現象学からカントの先験哲学を解釈したものとすれば、この論文はいわば現象学そのもの中に於てカント哲学を見たものともいえよう。カントとの関係はここに於て最高潮に達したといえるであろう。

一〇　先験哲学と生命界

「危機」の前半第一・二部は一九三六年リーベルト編纂の「哲学」誌上に発表され、その後半第三部及び附録諸篇が遺稿として、前者と共に一九五四年フッセリアーナ第六巻となって公表されたのである。そこに於て生命界なる新しい概念を導入し、更に従来の心理学乃至人間主観に対する新しい見解を示し、歴史及び人間性に関する考慮を含み、現象学展開に於て、「イデーンとデカルト的冥想録」とに対し、第三の乃至最後の段階を示すものである。以上の見地からカントについても特有の批判を加えている。

一　哲学史上に於けるカントの位地

近代初期ガリレイから始まる客観主義に対して、デカルトの主観主義的転回が起った。即ち「この私」の理性に於て作られる理性形象はいかにして客観的に「真なる」即ち形而上学的超越的な妥当を要求することが出来るかという問題が提出されたのである。ここに於て始めて理性批判乃至先験的問題が提出されたのである。然るに彼はこの問題に対し、自己の心理的自我を以て真の自我とし、心理学的内在を以て真の自我論的内在とした。これが後にカントにも変った形で表われた。即ちカントの心理主義はここに基づくといえるであろう。(VI83)

又一方カントはヒュームによって独断の迷夢をさまされたというが、本来カントはデカルトからロックを経て来た発展線上にあるのではなく、即ちカントはヒュームの後継者ではなく、寧ろデカルトからライプニッツを経

てヴォルフの影響の下にある。ここにカントの合理主義の源がある。(VI94)

しかし一方ヒュームの経験主義的心理学の影響をも受けたカントにとって、純粋な理性的真理と形而上学的客観性との間に不明瞭な深淵のあることをヒュームによって感じさせられたと共に、他方ヒュームの様な感覚論者のいう様に単なる感覚与件を以てしては経験の対象は成立しないことを見抜いた。而してそのためには、精神の能作の必要なることに気づいたのである。(VI96) 即ち若し一般に経験が可能であるならば、或は学問的認識が可能であるならば、理性は二重の作用をしていなくてはならぬ。その一つは自由にして純粋な数学化及び純粋数学的学問の作用の中に於ける体系的な自己開示である。その際理性は純粋思惟として純粋直観の形成を前提とする。而してこの二つの能力の客観的成果が学問である。理性のもう一つの作用は、絶えず隠れて行っている理性の作用即ち絶えず感性の与件を合理化しつつある所の、而していつも既にかかる与件を合理化してしまっている所の、理性の作用である。その客観的成果は感性的直感的な対象世界である。いわば環境的経験の世界である。(VI97) かくて直観的物体界も自然科学の世界も一般に我々の知性の主観的形象である。かくしてカントは自然自体についての外見的な合理主義の素朴性を露呈するのである。(VI98)

然し一方カントの見たヒュームは真のヒュームではない。ヒュームの真の問題は、我々の日常抱いている世界確信の素朴的自明性、但し日常生活の確信と共に、かかる日常的世界に基づく学的理論的構成の確信が、いかにして明らかなものとなり得るか、ということである。ヒュームによれば、一切は主観性に基づくという徹底的な主観主義である。この自明性の開示の点がカントの見落した所である。

カントがかかるヒュームの謎につき当らなかったのは、前述の如くカントの問題が、デカルトからライプニッ

ッを超えてヴォルフの下に流れる合理主義の地盤の上にあったからである。

かくて歴史上のカントの位地を定めることが出来よう。特に興味深いのは、ヒュームの虚構主義に対し、デカルト以来初めて先験的主観主義といわれ得る偉大な体系を打ち立てた学的哲学がカントに於て表われた事である。(VI99)

二　カントと先験哲学

先験哲学とは、最広義に於て次の様な原本的動機に対して名づけられるものである。即ちそれはデカルトを通してあらゆる近代哲学に意義を与えている動機であるが、それはそれ自らに帰えり来ようとし、而して真正にして純粋な問題形態と体系的形成を得ようとする動機である。(VI100) 即ちそれは最後の源泉に戻る動機であり、認識する生命自らに戻る動機である、或は私の具体的生命一般を有するものとしての私自身に戻ることである。(VI101)

かかる普遍的意味に解する場合、カントの哲学は、全くあらゆる学問全体を実際に厳密に基礎づけるという事には甚だ遠いけれども先験哲学といえる。(VI101-2) しかしカントはデカルト程の深さを有していない。(註) 元来先験的哲学は哲学者が源泉的に行う主観性として自己自身への明瞭な理解にまでつき進む場合に始めて、その現実的にして真正なる存在或は端初に来るのである。それから考えれば、カントの哲学は、そこへの途上にあるといえる。従って我々の定義の形式的普遍的意味に該当するであろう。(VI102)

註　カントとデカルトとの関係については、(VI Beilage X 1936, 426)

要するにカントは一つの転換点であって、そこに於て一切のそれ以前の哲学を客観主義として、先験主義に対立せしめるのである。カントの転回とデカルトの転回とを対照させつつ究極の転回に進まねばならぬ。(VI103)

三　生命界の前提

a　カントの前提　カントは自分の哲学によって合理主義を転覆せしめたと信じた。(註) 確かに合理主義は学問的認識に際して世界意識の主観的構造を問題としなかった。しかし一方カントも彼自身の哲学が不問の前提に基づいている事、而して彼の疑いもなく偉大なる発見もその前提の中に隠されていることに気づかなかった。即ちカントの問題提出の中には、我々が日常住んでいる日常的生命界が存在しているということの前提が含まれているのである。(VI105)

註　合理主義とカントとの関係については、(VI Beilage XV 1936-7, 454)

かかる偉大な発見—単なる予備的発見だが——の一例として、前述の様な悟性乃至理性の二重作用に関することを挙げることが出来る。しかしその基礎づけは彼の遡行法では出来ない。確かに第一版の先験的演繹に於ては根源的源泉による直接的基礎づけの一歩を踏み出した、しかしその心理学的側面のために、開かれるべき基礎の問題に近づくことなしに瓦解したのである。(註) (VI106)

註　第一版について、(VI455)。ここにも同様のことを述べている。

b　生命界の意味　生命界の前提を自覚し、その自明性に戻り問うや否や無限の問題が開かれて来る。これこそが根源的問題なのである。それにも拘らず従来のいかなる科学も哲学さえも、この主観的領域を主題としなか

った。(VI114)

しかし元来かかる生命界は一切の前学問的及び学問的生命の前提であって、かかる生命界に於ける所与仕方の流れの変遷の中に我々にとって絶えず存在する世界は、普遍的な精神的所得[1]であり、かかるものとして生成したのであり、又同時に精神的形態の統一として即ち意味形態として――普遍的究極的な作用をする主観性の形象として――生成し続けるのだということを理解しなくてはならぬ。その際この世界構成的能作には、主観性が人間的主観性として世界の組成としてそれ自ら客観化する[3]ということが、本質として属している。あらゆる客観的考察は、外的考察であり厳密な世界考察は自らを外化する主観性の体系的な純粋な内的考察である。(VI115-6)

(1) 普遍的生命について、(VI275, 393)

(2) 主観の客観化について、(VI275)

c 神話的誤り カントの遡行法や先験的主観の能力機能形成については不明の点が多い、それはカントが神話的な言い方をするからである。(VI116) 今その一例として内感の説を見る。それは我々にとっては人間的心理学的な領域にあると解される。若しかかる内部知覚に心理学的意味以外の意味が与えられないとすれば、客観的「現象」としての学問的に真なる世界を構成すべき先験的主観性の意味は、いかにして明らかになるだろうか。(VI116-7)

カントはたとえ経験主義に反対したとはいえ、しかも心については正に経験主義に依存した、即ち心は人間の心であり、自然化された心である。しかし真に必当然的なるものに還元された自己知覚は、かかる自然化された心の自己知覚と同一視されるべきであろうか。カントは一方内部知覚を経験主義的な精神物理的な意味に従って

理解し、しかも他方ヒュームの懐疑論に警められて、心理学への帰着を不合理のものとして恐れることによって、遂に神話的な概念構成に陥入ったのである。(VI117)

d　誤れる遡行法　カントは彼の遡行的方法の成果を直観的概念におきかえることを妨げ、而して根源的にして純粋明証的な直観から出発して現に明証的な個々の歩みを進む前進的な建設を貫徹しようとするあらゆる試みを妨げた。それ故彼の先験的概念は全く特有な不明瞭さを有している。(VI117-8)

若しカントがかかる心理学に囚われなければ、異ることが生じたであろう。しかしそのためには、問題なき自明性に依存するカントの遡行法とは異る遡行法が必要であろう。それは神話的な誤れる構成的閉鎖的なものではなくして、全く直観的開明的な方法であり、それはその出発点に於て又それが開示するものに於て直観的である。そこに全く新しい直観概念と全く新しい存在領域の自己把握とが生ずる。(註)(VI118)

註　かくてカントの遡行理論に対し、真正な厳密な遡行によって始めて真の理論への途が求められ得る。その真の理論は実際最早遡行的ではなくして、究極の根拠からの上昇であり、従って前進的に経過しなくてはならぬ。(VI455)

e　誤れる心理主義　カントが遡行法によって、一方所与の世界を使用し、しかも他方先験的主観性を構成するならば、世界に含まれる人間の心がこの全世界を構成するという不合理に陥入る。これが誤れる心理主義である。(VI120)

f　先験的機能の発見　しかしカントの理論に於て洞見されるべき真理があるとすれば、それはカントの目指した客観的認識を明らかにすべき先験的機能は生き生きした精神性の一つの次元であって、この次元は自然的障害によって一般の人間や科学者に幾世紀も隠されていたが、今や適当な方法によって明証的に近づき得るという

ことであろう。(VI121)

g　生命界の把握　しかしかかる根源に帰えるには、一切の前にある生命界を本質的に把握することが問題となる、しかもそこに於て直線的及び反省的な把握が行われなければならぬ。(VI125-6)それではかかる生命界と先験的主観性及び人間主観性の三者は、どの様な関係にあるのであろうか。

四　心理学的世界

a　先験的哲学と心理学

この両者の関係を考察することによって、先ず二つの主観性の関係が明らかになり、心理学の新な使命が見出される。

先験哲学とは本来意識主観性への反省から生じ、その意識主観性の中に於て世界の存在と認識とを見るものであり、従ってそれは純粋に精神的な世界考察を形成すべきものである。この様に先験哲学が精神的なるものと関係するならば、それが再び心理学に陥入りはしないかという疑問が生じよう。しかし若し従来の心理学が正しくないならば、新しい心理学が成立してもいい筈である。(VI205)

固より経験的主観性と先験的主観性との間に不可避的に相違がある。それにも拘らず両者の間の同一性も亦不可避的であり、しかもそれがよく理解されていない。元来先験的自我としての私自我は世界を（真に）構成する、而して同時に人間的自我の心として世界の中に存在する。世界に法則を命ずる悟性は、私の先験的悟性である、而してこの悟性は、その法則に従って私自身を形成する、しかもその悟性は哲学者としての私の心的能力である。

フィヒテのいう、自己自らを措定する自我は、フィヒテの自我以外のものであり得るか。若しこのことが不合理ではなく、解き得べき逆説であるならば、我々の内部経験を問い而してその範囲に於て追求し分析するという方法以外の方法が、いかにして我々を明瞭にまで齎らす助けとなることが出来ようか。即ち若し個々の自我としての私が、先験的「意識一般」として自然を構成する悟性の担い手であり得ないならば、私はいかにして私の個々別々の自己意識を超えて普遍的な自己意識即ち先験的相互主観的自己意識を持つことが出来ようか。しかしその際次の事を見逃してはならぬ。即ちその際私自身を内部経験に於て問うこと以外には、いいかえれば私が他者と共同的人間とを一般に獲得し所有する意識仕方に関して問うこと以外には、いかにして意識が先験的問題となり得るかということである。(VI205-6)

その際心理学は無頓着であり得るか、心理学はかかる問題を取扱ってはならないか。不明な形而上学や神話に迷い込んだカントやその後継者にも、同じような疑問が向けられる。それにも拘らず我々は、我々人間の理性及び人間の或は人類の能作についての学問的概念の新しい研究によってのみ、即ち真正なる心理学の学問的概念の新しい研究によってのみ、絶対的理性とその能作についての学問的概念を獲得することが出来ると考えるべきであろう。(VI206) カントはこの点に気づかなかった。(VI211)

元来先験哲学と心理学とが分離したのは、両者に罪がある。即ち一方先験哲学は、根源的明証からの汲み出しを全く欠いている様な概念と（誤れる）構成とに固執し、かかる概念と構成とを以て本来価値のある経験的考察を解釈しようとした所に主な罪がある。若し心理学が拒まれなかったらば、心理学は具体的に研究しようとする先験哲学にとって、必然的に仲介的な労をとったであろう。しかし他方に於て心理学が拒まれたのは、心理学

が既にその創設の際に新しい自然科学と並ぶ所の新しい心理学として成立し、而して心理的存在の普遍学としての心理学にとって本質的に適しい唯一の真正なる任務の意味について問うことを捨ててしまったからである。(VI206-7)かくて今や心理学は根本的改革を必要とし、その真の任務の正当な純粋な貫徹は、自ら必然的に先験的主観性の学問にまで、従って普遍的な先験哲学への転化にまで導かれねばならぬ。(VI207)

かくて一方具体的な心理学を越えて先験哲学への途が導かれねばならぬと共に、他方先験能作が先験的意図の下に研究されるにも拘らず、この先験的能作をも、心理学的内部分析の中に於て後で再び見出すに違いない。又逆に私の統覚的生命についての心理学的展開も、それが心理学的研究であるにも拘らず、私が今一層高い層に於て客観的統覚にも意味を与える能作をも絶えず考慮に入れるや否や、先験的見方に移行して先験的意味を獲得しなければならないのである。(VI210)

要するに純粋心理学は先験的哲学に帰着する。(VI261, 263)それは現象学の前段階ではなくして、現象学内部に於ける一つの段階である。(註)(VI515)二つの主観性の関係も正にこの様なものであろう。

註　先験心理学について、VI313, VII402, I 70, 119 心理学について、従来と異る見解に気づくであろう。尚これについては、「自然科学的及び精神科学的見方」参照。VI294ff.)

b　絶対的相互主観性と哲学

i　次に生命界と主観性とは、どの様な関係にあるであろうか。先ず絶対的に作用する主観性を発見することが問題である。但しそれは人間主観性ではなくして、人間主観性の中に或は差し当って人間主観性の中に自らを客観化(註)する主観性を発見することである。(VI265)

註　客観化について、(VI116, 210, 275, VII278)
ここに人間主観の新しい見解が見出される。

そこで先験的根源的生命[1]の中に於て世界を構成する（かかる絶対的な）主観性と、先験的相互主観の生命共同体の中に自ら極理念[2]として絶えず予示され確証される世界としての世界自身との間の先験的相関[3]は、世界に於て経過する謎の様な相関ではない。先験的相互主観性の具体態の中に於て、即ちその普遍的生命結合の中に於て、極或は世界といわれる個々の極の体系が正に志向的相関として、丁度或る志向作用の中に於てその相関的具体態から全く不可分の対象性が含まれるのと同様に、含まれているからである。(VI266) この志向的相関の両項が、それぞれ前述の生命界に於ける直線的（対象的）側面と反省的（主観的）側面なのである。[4] かくて主観性とは、一方具体態としての生命界を意味すると共に、他方そこに於ける志向的相関項の主観側を意味するのである。

(1) 生命界にも諸段階がある(後述)(VI306, 308)
(2) 理念について、(III367, 370)
(3) 生命に於ける相関について、(VI275)
(4) 前者は生命界に於ける存在論的側面であり、後者或は両者の相関を見るのが生命界の現象学或は真の先験哲学であろう。(VI145, 176-7)
観念論と実在論との関係も、かかる立場から見直されねばならぬ。(VI271-2)

ii　それではかかる主観性は生命界に於て如何なる意味を有するものであろうか。理性[註]とは元来人格的な現実的作用と所属性との中に生きている存在（生命）としての人間の特有なるものである。その生命は人格的なものとして絶えざる志向性の展開の中に絶えず生成する。その生命の中に生成するものは、人格それ自身である。而

して人間的人格的生命は個々別々のその場その場の作用の自己反省と自己責任の層から普遍的な自己反省と自己責任の層にまで、更に自律性の理念即ち彼の全人格的生命を普遍的自己責任に於ける生命の綜合統一にまで形成しようとする意志決断の理念の意識的把握に到るまで層をなして経過する。即ちそれは真の自己、自由自律の自己を形成しようとする事であり、自己に忠実ならんとし、理性自我としての自己と同一ならんとすることである。(VI272) しかしこの事は個人人格と共同人格との不可分の相関々係に於て行われる、即ちあらゆる関心に於ける両者の内面的な直接間接の結合に基づいて必然的に、個人的人格理性は共同体的人格理性としてのみ又その逆の関係に於て、益々完全に実現されることが出来る。(VI273)

註　理性について、(VI275-6)

かくて（理性によって成立する）普遍的にして必然的に基礎づけられ、又基礎づける所の学問（即ち哲学）は、必然的に最高の人類の機能として、即ち個人的な及び包括的な人類的な自律性——最高の人類層の生命衝動力をなす所の理念——への展開を可能ならしめる機能として生ずる。従って哲学は「合理主義」に外ならぬ。勿論それは、いろいろの層をなしている、即ちそれは理性のたえざる自己開示であり、それはめざめたる理性の自己理解である。(VI273) かくて人間主観性は理性に基づき哲学的反省を通して生命界に於ける普遍的自己理解を行うとするのである。

かかる必当然性の要求を発見し、始めて明らかにその要求をとり上げた人は、デカルトである。然しその後充分明らかにならず、その不十分さが起した反動がヒュームを除けばカントとその後継者の先験哲学である。然しそこに於ては先験的な根本動機はめざめていない。かくて今や第二の発見が行われねばならぬ。(VI274)

iii　それではあらゆる哲学の根本地盤と根本方法をなす先験的な意味での必当然的認識とは何であるか。正にかかる認識を以て哲学が始まるのである。即ち自己自身に帰える絶対理性[1]の支持者としての、或は必当然的自己存在の中に於て自分の共同主観とあらゆる可能なる共同哲学者とを含むものとしての、哲学する自我の最深最普遍の自己理解の哲学がそれを以て始まるのである。かくてその認識とは、絶対的相互主観性[2]（それは人類として世界に客観化される）の発見であり、その主観性は、その中に於て理性が暗黒化したり明瞭化したりして、無限の過程に於て明瞭な自己理解へと動いているものである。或はたえざる世界構成の先験的生命に於ける絶対的（究極的意味での先験的）主観性の必当然的具体的存在仕方の発見と、それに相関的に「存在する世界」の新しい発見である。[3]この「存在する世界」の存在意味は先験的に構成されたる意味として、以前の段階に於て世界世界真理世界認識といわれたものに対して、新しい意味を与えるのである。而して正にかかる主観性と世界との発見によって、人間の現実存在にも、先験的主観性とその存在乃至その構成する生命との自己客観化[4]としての新しい意味が与えられ更に人間存在には、本来の人間存在への自己責任を持つものとしての究極的自己理解を実現するものとして、即ち必当然性に於ける生命への使命を有する存在としての自己理解を実現するものとして、新しい意味が与えられるのである。[5]結局人間存在は目的論的存在であり、当為存在[6]である。（VI275）かくて理性は一切のものの中に、自己理解によって必当然的な Telos を認識することが出来る。而して究極の自己理解のこの認識が、先天的原理による自己理解或は哲学の形式に於ける自己理解以外のものではあり得ないのである。（VI276）

（1）絶対理性について、（VI272, 276）
（2）絶対主観性について、（VI257, 393）

(3) 生命に於ける相関について、(VI 266)
(4) 客観化について、(VI 116, 210, 265, VII 278)
(5) 人間主観乃至人間主義についての新しい見解、
(6) 存在論について、(VI 94, 99, VII 227, 280)

かくて人間主観の普遍的自己理解は、絶対的相互主観の先験的生命に於ける自己理解としての世界構成の開明にまで究極する。それが人間主観の真の自己責任であり、そこに真の哲学が成立する。而してそれが同時に先験的主観性の自己理解であり、そこに真の先験的哲学が成立するのであろう。

結論　要するに生命界にも個々の生命と共同的乃至交渉的生命と普遍的生命とが見出される。普遍的生命が今述べた絶対的相互主観性に外ならぬ。但し生命界といつても自然的自然主義的自然なと三通りある。(VI 306, 309) 日常的な生命界は自然的生命である。これに対し自然科学的乃至客観主義的見方による生命が自然主義的生命である。日常的生命界は既にかかる自然主義的見方に被われた生命である。これに対しかかる客観主義的乃至前現象学的見方を除去し、現象学的に或はそのありのままの真の本来の状況に露呈せしめられる生命が、自然なる生命である。現象学に於ていう所の先験的生命界はかかる意味での生命界である。而してそれは前述の如く、一方絶対的相互主観性と同義であるが、それは狭義の場合であって、広義に於ては、かかる主観性と共に、それが自らの相関として構成する世界をも含む具体態としての生命線である。かかる生命線についての現象学的及び本質的還元の下に於ける志向的分析が現象学乃至先験哲学の究極的段階である。しかもそれが従来の様に、人間主観乃至心理学からの端的な隔絶の下にではなく、それらとの関連の下に求められるのである。而して人間とはかか

る先験的生命の客観化であり、従ってその客観化されたものから逆に主観化するのが人間の自己理解であり自己責任であり使命であり、人間の歴史目的論的展開である。かかる使命充実の根源が理性でありエンテレヒノである。近代初期以来被われた人間理性――ここに危機がある――は、今や現象学によって究極的に開明されようとする。その先駆者として、但し第一次的本来的にデカルトが、第二次的副次的にカントがそれぞれの意味を持つものであろう。

フッサールは一九三七年の覚え書の最後の所で次の様に述べている。今や我々は先験哲学の真実な課題の発見と最後の基礎づけの方法とにつき進むために、差し当りカントとの接触を行った。（たとえ我々の現象学的哲学は、カントによってではなく、一層直接にデカルトと英国経験論者特にヒュームによって批判的に規定されているとはいえ）と。（VI455）

最後に最近の現象学関係の文献を示して参考に資する。（順序不同）

G. Funke: Zur transzendentalen Phänomenologie, 1957.
B. Lorscheid: Max Schelers Phänomenologie des Psychischen, 1957.
J. Kraft: Von Husserl zu Heidegger, zweite erweiterte Aufl., 1957.
S. Bachelard: La Logique de Husserl, 1957.
S. Bachelard: E. Husserl, Logique formelle et logique transcendentale, Traduction, 1957.
A. Diemer: Edmund Husserl, Versuch einer systematischen Darstellung seiner Phänomenologie, 1956.
W. H. Müller: Die Philosophie E. Husserls nach den Grundzügen ihrer Entstehung und ihrem systematischen Gehalt, 1956.

A. Podlech: Der Leib als Weise des In-der-Welt-Seins, 1956.

T. W. Adorno: Zur Metakritik der Erkenntnistheorie, Studien über Husserl und die phänomenologischen Antinomien, 1956.

S. Strasser: Seele und Beseeltes, 1955.

G. Brand: Welt, Ich und Zeit, nach unveröffentlichen Manuskripten E. Husserls, 1955.

Q. Lauer: Phénoménologie de Husserl, 1955.

A. D. Waelhens: Phénoménologie et vérite, 1955.

Les études philosophiques, No. 1, 3, 1954.

(en préparation, Éditions Martinus Nijhoff-La Haye)

E. Fink: Sein, Wahrheit, Welt. Vor-Fragen zum Problem des Phänomen-Begriffs.

Le projet husserlien et la philosophie moderne (Actes du Deuxième Colloque International de Phénoménologie, Krefeld, 1-3 november 1956)

Phaenomenologica (Collection publiée sous le patronage des centres d'Archives Husserl), sous le titre EDMUND HUSSERI. 1859-1959.